

三 人 口

人口の増減は、町勢の重要なバロメーターともいわれているが、大正九年第一回の国勢調査が実施されてからの人口の動きは表1のとおりである。

大正初期の第一次世界大戦にもなつて国内産業は軍需生産を主とする工業が発展し、産業の構造は農業中心から工業へと大きな変化を生じ、人口の都市あるいは工業地帯への流出が続いた。そのせいか本町でも大正九年から十四年にかけては人口は停滞し増加の傾向はみられない。

第一次世界大戦による戦後ブームも一時的で大正デモクラシーのもとその後不景気は深刻化し人口流出は齒どめされた。昭和期に入つても景気は回復せず、農村は農産物価格が下落し農村恐慌はその極に達し、それに加え

表5 町債借入状況

	昭和	
	借入高	
総 額	167,400	
一般公共事業債	7,000	
一般単独事業債	21,100	
公営住宅建設債	65,900	
義務教育施設整備事業債		
災害復旧債		
一般廃棄物処理事業債		
厚生福祉施設整備事業債		
公共用地先行取得事業債		
市町村民税減税補てん債		
過疎対策事業債		
同和対策事業債		
都道府県貸付金	2,700	
財源対策債	70,700	
財政対策債		

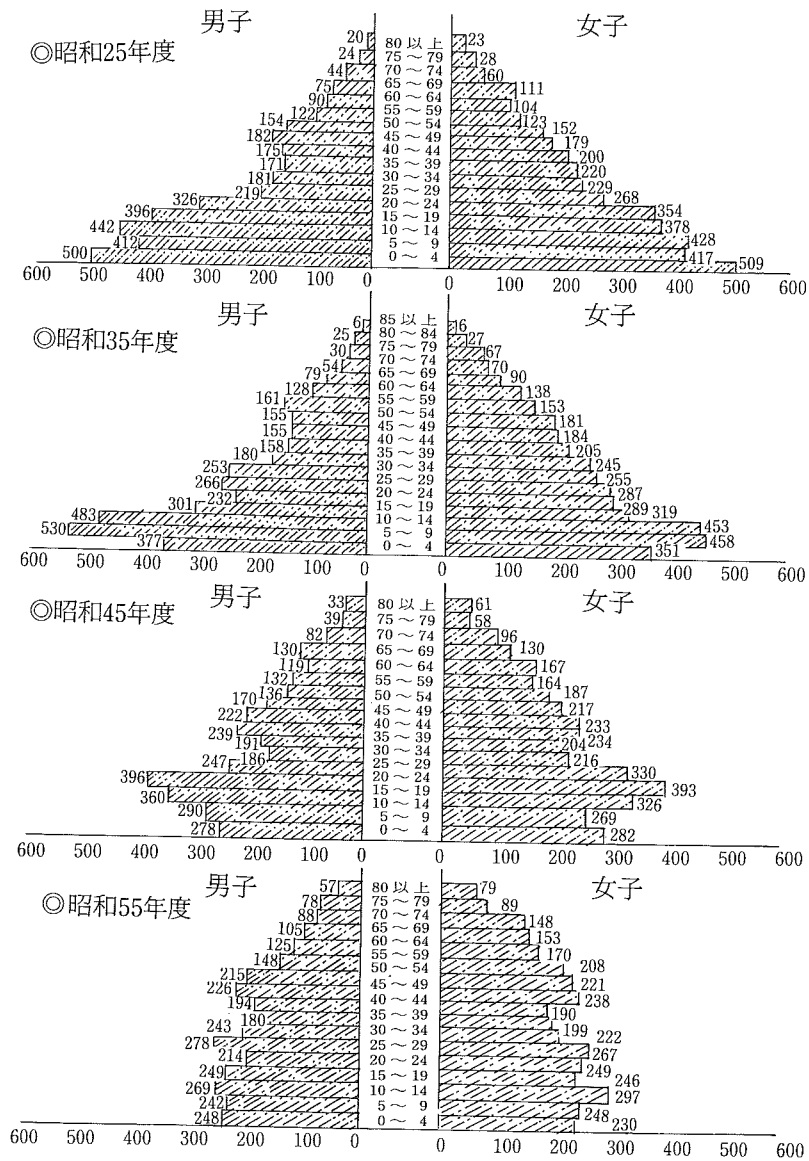
資料：町総務課

(一般会計)

(単位 千円)

53年度		昭和54年度			昭和55年度		
償還額	年度末現在高	借入高	償還額	年度末現在高	借入高	償還額	年度末現在高
18,280	456,748	204,100	21,909	638,939	174,600	53,200	786,590
248	45,552		266	45,286		3,926	41,360
3,870	72,285		7,057	65,228		7,139	58,089
	131,400			131,400			131,400
362	6,690	122,200	386	128,504	121,400	1,492	248,412
1,924	18,276		2,071	16,205		2,229	13,976
246	5,025		499	4,526		533	3,993
9,220	158,240	81,900	9,220	230,920	53,220	9,220	274,900
2,410	19,280		2,410	16,870		2,410	14,460

図1 年齢階層別男女別人口



益々不利となり、本土の各地は空襲を受け大都市から学童や母子疎開が進み、農村地方の人口は急激に増加した。

そして終戦、外地からの引揚げや兵士の復員などで人口は増加し、更に出生人口も増加して昭和二十二年には七〇七三人、二十五年七三二六人に増加し、いわゆるベビーブーム時代の出現をみた。然しこの頃をピークに人口の増加率は停滞し、昭和三十年の七四四五人を最高に次第に人口の減少が顕著になってくる。

このように本町の人口が毎年のように減少したのは、一つは主に農業資本装備の高度化及び農業経営の近代化による労力の余剰と、都市の戦後の復興が進み、工業の発達は必然的に農村労働力を吸収していく結果となった。一方では生活水準や教育水準の向上によりその経費の増大などによって家族計画の思想が普及し、昭和三十年をピークに減少方向に向った。

その後昭和五十年までは減少を続け、昭和四十年から四十五年までの五年間には実に二七二人、総人口の約四％もの減少があった。しかし五十一年以降は次の諸点を背景にして増加傾向に転じた。即ち第一次産業から二次・三次産業への移動が限界に達し、流出するものはかなり流出し尽したと考えられること。高度経済成長の過程で地方圏でも雇用機会の創出が進み、大都市圏と地方圏との所得格差が縮小してきたこと。生活に対する意識や価値感が変化したことなどである。

世帯数は過去の人口減少期でも漸次増加し近年は核家族化が更に進み増加を続けている。昭和三十年一二七三世帯であったのが昭和五十五年は一四九〇世帯と二一七世帯の増加をみている。したがって一世帯あたり人員は、昭和三十年五・八五人から昭和五十五年は四・四四人と減少している。

東与賀町人口減少の主な原因は若年人口の流出であることは前にものべたが、年齢階層別の構成を昭和二十五年以降の国勢調査によって比較してみると、三十歳未満が急速に減少している。全体的にみて底辺の広いピラミッド型からつり鐘型にうつつてきて、相対的に老人が増加していることがうかがえる。

表4 集落別世帯数及び人口

(昭和57年3月末)

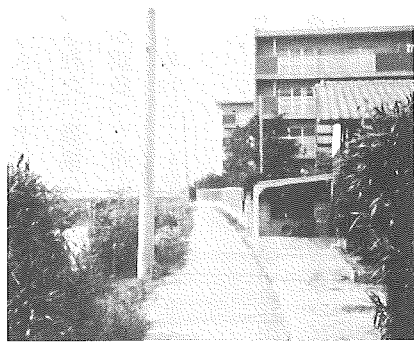
	世帯	人口	男	女
立野	86	338	169	169
実久	45	171	86	85
鍛冶屋	28	101	48	53
上町	20	81	36	45
船津北	28	102	43	59
船津南	31	132	59	73
下古賀	88	357	182	175
今町東	82	405	199	206
今町西	74	358	159	199
中割	25	117	53	64
搦東	67	296	136	160
搦西	96	409	195	214
梅田	37	164	76	88
上古賀	27	115	61	54
田中	26	120	63	57
作出	127	522	250	272
新村	53	226	102	124
中村	68	345	168	177
住吉東	79	373	186	187
住吉西	55	258	114	144
大授(一)	20	94	44	50
〃(二)	30	158	74	84
〃(三)	17	73	44	29
中飯盛	55	244	122	122
下飯盛	81	351	168	183
大野(一)	63	294	144	150
〃(二)	68	313	155	158
〃(三)	69	308	146	162
〃(西)	30	116	55	61
計	1,575	6,941	3,337	3,604

四 交通・通信・道路

(一) 交通

(1) 昔の交通

明治の頃までは、佐賀へ行くことも一般では稀で、殆ど用の事は村中でまかなわれた。佐賀への主な通路は、田中・下古賀・現在の町営住宅西側の堀添いに北上して鹿の子の西側を通り佐大の中を南から精町へ抜ける道が即ち東与賀往還であった。この道すじの全部が石橋で、その面影があったが圃場整備事業で名残をとどめるものも少ない。西には中飯盛―上飯盛―正里を通つての経路や東は川副側の八田江土井を利用した。昔時の八田江土井は松が多く笹が繁り、けもの道のようにしていて、早朝神埼の仁比山へ小麦粉ひきに行くときはまむしよけに笹を片手で先におし麦一俵を荷負つて通つたと伝えられている。勿論徒歩で、荷はかつぐか馬の背に積んで運ぶかの何れかであった。後に大八車が使われ始



昔の東与賀往還の名残(下古賀)